

3種類のジャンプ試行における創作ダンス学習経験の特性

保健体育教室 佐分利 育 代

The Features of Experience of Learning Creative Dance,
on the Case of Tring 3 Jumps.

Ikuyo SABURI

1. 目 的

「楽しい体育」によって、創作ダンスも手段を離れ、そのものを楽しむことで特性を発揮できるようになった。

「楽しいだけでよいのか」「何を教えてよいのかわからない」「よい動きを教えなくてよいのか」これら10年目の「楽しい体育」への疑問は40年以上にわたるダンス教育、特に創作ダンス指導の課題であった。学校におけるダンスが既成作品から創作に移った当時は、「児童中心、与えるのではなく取り出すところにその意味がある」¹⁾との教育理念を掲げながらもなお、創作の場合には動きの根本となるべきものとして「基本運動」の訓練の重視をとえ、「合理的な運動」「舞踊する身体」を練る内容を無視できなかった²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾が、「子どもの内的欲求に基づいた、創る、踊る、観るのダンスのまると体験」「子どもの体験と照らしながらの課題設定と指導法の具体化」など、個に応じた、個性を生かす指導が研究され、客観化され、現在ではかなり現場にも浸透してきたように思われる。

今回の指導要領改訂は、創作ダンスにとってまた一つの転換期をもたらした。様々な種類のダンスからの内容の選択と、体育の一領域としてのダンスそのものの選択性の導入である。新たな、しかし、創作ダンスが40年間引きずってきてさらに深刻になりそうな問題がクローズアップされた。それは、創作ダンスが子どもたちに体験されるかどうか。ダンスが生徒ではなく指導者に選択されるかどうかの問題である。

学習内容、指導の手がかり、指導過程が明らかにされてきた必修の時代にさえ、「何をどう教えたらよいのか」問われ続け、かなり多くの指導者に選択されなかった。指導者が学習の場に持ち込まなければ、創作ダンスの経験は子どもに届かない。三浦⁶⁾や新開谷⁷⁾が指摘するように、小学校でのダンスの特性に触れる学習経験なしでは中学校での生徒自身による選択は不可能であり、男女の必修に限らず生徒相互の良さを生かし合う学習も成立しにくい。

学習内容の具体化に加えて何が明らかにされれば指導者がダンスを、その中でも教えにくいとされている創作ダンスを選択するのであろうか。このことが創作ダンスにとっての新たな、そして古い問題である。

学習経験者の意識調査によるプラスへの変化もこれまで多く報告されているが指導を経験していない教師に対する創作ダンス選択への説得力は今一つだったように思える。これに対し柴は体育学会41回大会で大学生を対象にダンス学習における創造性の陶冶に関して、S-A創造性検査による経験者と未経験者の資料を提供した。創作ダンス学習の特性を、他の領域では得られない経験があることで示そうとしたものとして注目できる。

手段としてではなくそのものを楽しむ中で、子どもたちが体験でき、自分のものとして獲得できるものは何か。創作ダンス学習の特性とされている「創造性」や「個性」「表現性」がどんな形で子どものもものになるのか。それは子どもの運動観とどう関わるのか。他の領域では得られない特性が本当にあるのか。これらに対する客観的な資料はまだ十分に示されていない。これらが具体的に示されず一般的な観念だけでは、経験のない指導者には教材研究に向かうだけの意欲につながらない。実際の調査でも、「表現も運動も他のもので間に合う」と考えている指導者があり、ダンスの特性を具体的には理解していない指導者の存在も明らかであった⁸⁾。選択制という公の指示を得て、指導者によって創作ダンスが選択されなくなる恐れは多いにある。創作ダンスのみでなく、フォークダンス、そして準備運動にされてしまいがちなリズムカルなダンスについても、その特性を子どもたちが本当に楽しめるためには同じ問題を明らかにしていく必要がある。

今回は、創作ダンス学習で学習者が体験し獲得するものは何か、体育の他の領域では得られないものはあるのかについて、学習経験者と未経験者の運動試行の比較より、検討したい。

2. 方法

《方法》

1単元の創作ダンス（表現運動）学習を経験した小学校3年生と、未経験の小学校3年生を対象に、「3種類のジャンプ」を課し、下記のような験者による同一の導入で練習させた後、一人ずつ試技させ、ビデオテープに収録、何を変化させて3種類のジャンプを行っているか、形態、空間、時間、力の要因に関して分析し、その特性を比較検討する。

ダンス学習を経験していない子どもにもダンス的な意味を持たせずに課すことができ、調整力、筋力等運動実施能力の凝縮されたものとの観点よりジャンプをとりあげ、創作ダンス経験の特性とされている「創造性」や「個性」「表現性」の具体例として、いろいろなジャンプができるという視点より、「3種類のジャンプ」を運動試行の課題として選択した。

・導入（実験）過程

1. 実験内容の説明
2. 準備運動（一斉に行う） 走・ウォームアップ 速さや方向を変えて
スキップ・高さ、大きさを変えて
のびる、ちぢむ・全身で動く 力を入れて
たおれる・全身で動く 力を抜いて
3. 3種類のジャンプの練習（一斉に行う）
験者の合図で一つづつくぎって練習
連続で3種類のジャンプをしてみる
4. ビデオカメラの前で一人ずつ3種類のジャンプを行う

《対象》

・創作ダンス学習経験者 68名

鳥取市内H小学校3年2組男子19名, 女子10名 (クラスA (C.A))

軽くて柔らかい感じの学習を中心に, たんぽぽ, しゃぼん玉, 風船などの表現や, 作品づくりを経験。それらしい動きの探求や, 具体的な動きのイメージを持つての作品構成と表現を行った。

6時間

指導. 森本愛彦教諭

鳥取市内S小学校3年1. 2組男子20名, 女子19名 (クラスB (C.B))

軽くて柔らかい感じ, 激しくて強い感じの学習を中心に, 新聞紙, 忍者, 河, 海, 花火などの表現を経験。河, 海, 花火は, 作品「忍者だぞー」としてまとめ, 学習発表会で発表。

「新聞紙」2時間 「忍者だぞー」約5時間

指導. 仲野知子教諭

・創作ダンス学習未経験者 30名

鳥取市内H小学校3年1組男子21名, 女子11名 (クラスC (C.C))

表現運動以外は3年2組とほぼ同じ領域を学習。

《期日》

S小学校(C.B)1989年12月19日 H小学校(C.A)1989年11月25日 (C.C)1990年2月3日

3. 結 果

3種類のジャンプという課題に対して同じジャンプを3回繰り返した子どもはC.Bで1人, C.Cで2人で, 残りの子どもは何等かの方法で3種類と思えるジャンプをしていた。

ジャンプをどのように変化させて3種類としているかを, 運動の形態, 空間, 時間, 力の表現要因で分析した。それぞれの子どもの3回のジャンプ間の相違について再生したビデオより使われた要因をとりあげると表1のようであった。

(1)形態の変化

イ. 変化させた身体部位

形態を変化させるのに, 身体のどの部位を使っているかを見ると, 図1のようであった。

ダンス学習経験群では, 脚と腕の両方を変化させて3種類のジャンプとしているのに比べ, 未経験群では脚だけの変化が多く, 腕も変化させている者は約40%でしかなかった。同じように胴や胸などの体幹を変化させている者が未経験群では少なかった。経験群では体幹も使い, 指先まで伸びた全身でのジャンプが多く, 未経験のクラスには腕の振りや全身のパネをを使っていないジャンプ

表1 変化の要因

要因	学 習 経 験 者		学 習 未 経 験 者
	C.A 44人 人 (%)	C.B 39人 人 (%)	C.C 30人 人 (%)
形態のみ	2 (4.5)	3 (7.7)	5 (16.7)
空間のみ	2 (4.5)		
形態と空間	29 (65.9)	13 (33.3)	19 (63.3)
形態と時間			1 (3.3)
形態と力		1 (2.6)	2 (6.7)
形態と空間と力	10 (22.7)	20 (51.3)	
形態と空間と時間			1 (3.3)
形態と空間と時間と力	1 (2.3)	1 (2.6)	
変化させていない		1 (2.6)	2 (6.7)

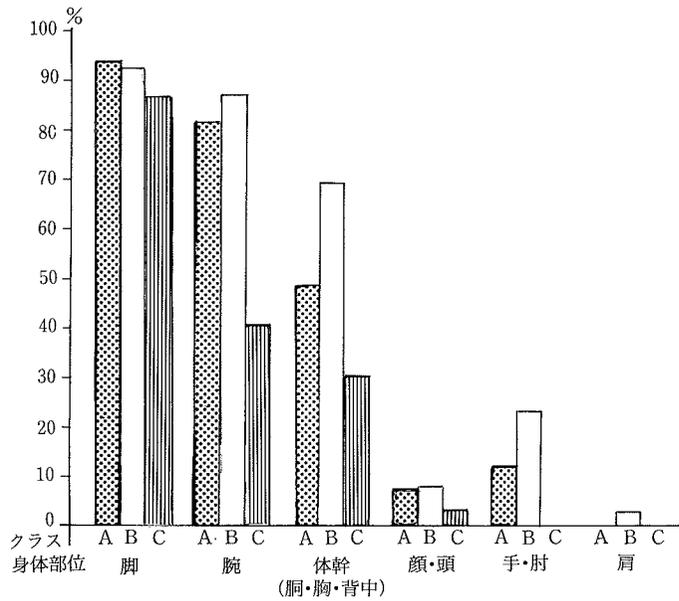


図1 変化させた身体の部位

が多かった。さらに経験群では手先や指までジャンプごとに変化しているものもあった。

ロ. 変化させた身体部位の数

図2は身体のいくつの部位を変化させているかを見たものである。

ダンス学習未経験群では身体のうち1ヶ所変化させている者と2ヶ所変化させている者が40%ずつであったのに対し、経験群では3ヶ所以上の身体部位の形を変化させている者がC.Aで61.4%、C.Bで71.8%もあった。

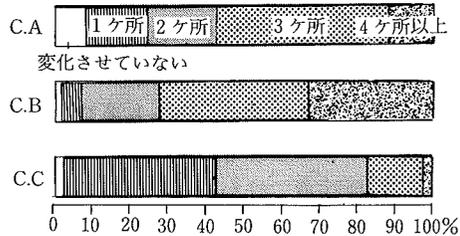


図2 変化させた身体部位の数

ハ. ジャンプの頂点での身体の形

ジャンプの際、その頂点で身体が作った形が対称か非対称かをみると表2のようであった。

経験群に非対称が多いことがわかる。

空中で、非対称の形が作れるという、「いろいろな」に対する発想力と、様々な身体部位を意識しながらジャンプという運動を行う調整力に関する経験の機会が、ダンス学習場面ではあるといえる。

表2 3種類のジャンプの形にみられる対称, 非対称

	C.A	C.B	C.C
左右対称が全部	0人	5人	14人
非対称が1つ	8	16	11
非対称が2つ	27	13	5
非対称が全部	9	5	0

ニ. 着地時の身体の形

経験群のC.Aで22人、C.Bで21人に手やおしりや背中、腹や胸で着地するジャンプが1種類以上みられた。ダンス学習未経験群では2人にそのような着地がみられただけで、残りの者は足で着地していた。経験群の足で着地しないジャンプはそれでも決して不安定さや未熟さを感じさせるものではなく、充分コントロールされた極限の運動によってなされたものであった。

着地はジャンプの結果ではあるが、ここにも「いろいろな」に対する要素が含まれていた。明らかに着地での形を予想したと思えるジャンプ（落ちるジャンプ）や、滑り込む着地、着地の方に面白さをアピールするようなジャンプなども経験群にみられた。

アンバランスを楽しみ、重心の移動のままに身を投げ出すことができるのが経験群の特性と言える。

(2)空間の変化

身体の形だけでなく、身体の向きや運動の方向などの空間要因の変化は経験群の大部分(C.A42人(95.5%), C.B34人(87.1%)), 未経験群にも多く(C.C20人(66.7%))みられたが、変化させるための運動の内容に大きな違いがあった。(表3)

未経験群(C.C)のほとんど(90%)がその場で自転しながらジャンプする、回転によるもので踏み切り位置と着地位置が変化していなかった。それも腕や身体の捻り、反りというものを使わない、膝の屈伸さえも少ない足だけでのまっすぐなものがほとんどだった。これに対し創作ダンス学習経験群で回転のみを変化の要因にしているのは、C.Aで16人(38.1%), C.Bで10人(29.4%)だけであり、残りの者は身体全体を捻って回ったり、様々な方向に飛び出す等の変化があった。経験群では前や斜め前に飛び出す者が多かった。うしろや斜めうしろに反ったままで跳ぶ者や、身体の横方向に飛び出す者、下に落ちるジャンプをする者もいた。これら空間に飛び出すジャンプは、ダンス未経験の子どもにはとても少なく、経験者ではかなりの子どもにみられた特性である。

すなわち、経験群は自分自身の身体の形だけでなく、自分を取り巻く空間をも自分の運動の結果変化させられるものとしてとらえていると思われた。また、表現、観てもらう運動としての学習が、空間(特に方向)を使うという知識を与えたとも考えられる。その考えが学習未経験者には無いといえる。

表3 空間の変化の内容とそれを使った人数

C.A 42人		C.B 34人		C.C 20人	
回る	33人	回る	21人	回る	18人
方向 前	7	方向 前	10	方向 前	1
斜め前	2	斜め前	6	斜め前	1
後ろ	6	後ろ	1	下(落ちる)	1
斜め後ろ	2	斜め後ろ	1		
横	1	横	3		
下(落ちる)	4	下(落ちる)	12		

(3)力の変化

力の要因に関しては、C.Bで半数の者にその変化が認められた。(表1)

一つ目のジャンプに比べ、フワリととか、フニャッ、あるいは突き上げる、たたき落とすなどイメージを感じさせるジャンプは明らかに力の要因を変化させていると思われた。脱力と緊張の違い、力の込め具合を自覚して変化させている。中には時間の要因と一緒にリズムが変化している3つのジャンプをしている者も2人ではあるがあった。

(4)経験群間にみられた違い

経験者群のC.AとC.Bの間にも以下のような相違点があった。

イ. C.Aには形態と空間を変化させているものが多く(表1), C.Bでは力の要素も加わった変化が多い。

ロ. 体幹を使っての変化がC.Bの方に多い。(図2)

ハ. C.Aには左右が非対称の形をしたジャンプを2つ以上した者がC.Bに比べ大変多い。(表2)

ニ. 方向の変化の中でC.Aには後ろへのジャンプ, C.Bには下に落ちるジャンプが多い。(表3)

これらの相違は、クラスの運動の印象としてビデオテープを観賞した第3者によってもあげられた。すなわち、創作ダンス学習経験者の3種類のジャンプの共通の印象「ダイナミックな」に加えC.Aは「しなやかな」「舞のような」、C.Bは「伸び伸びした」「死闘編」という評価を得た。

第3者による観賞とは1単位のダンス学習を経験した大学生3人にビデオを見せ、非験者一人ずつの3種類のジャンプについて印象を書かせた後、各クラス毎の印象を聞いたものである。

このクラスによる運動の違いは、学習内容の違いによると思われる。C.Aでは、リズム言葉などによって感じの出る動き、イメージによって深めた動きの探求をかなり熱心に行っていたし、C.Bは、新聞紙に変身、忍者に変身して花火にさらに変身するなど身体ごとになりきる学習が中心であった。学習内容と、学習者の運動の特性についてはさらに改めて検討したい。

C.Cのジャンプに対する3人の観賞者の印象は、「かたい」というのが共通していた。

5. まとめ

創作ダンス学習経験群は、未経験群に比べジャンプの種類を変える要因に関する情報を沢山持っており、それらを複合させて3種類のジャンプを行っていた。学習経験群と未経験群の3種類のジャンプの実施における違いは、具体的には次のような内容として現れていた。

[経験群]

- ・脚と腕、体幹を使ってジャンプし、それぞれの形を変化させている
- ・多くが3ヶ所以上の身体部位を使ってジャンプを変化させている
- ・ジャンプの頂点で左右非対称の形を作る
- ・身を投げ出し、身体の様々な箇所に着地している
- ・身体の形だけでなく空間や力を変化させている

[未経験群]

- ・脚だけの変化が中心で、腕や体幹を変化させている者は半数以下
- ・1～2ヶ所の身体部位の変化が多い
- ・ジャンプの頂点の形は左右対称が多い
- ・足での着地がほとんど
- ・空間の変化は自転による向きの変化でジャンプの方向は真上がほとんど

すなわち、運動を創るという点では、「全身で、特に腕や体幹、身体の左右や細部までその形を変化させられるもの」ととらえているかいないか、「自分自身の身体の形だけでなく空間をも自分の運動の結果変化させ得るもの」ととらえているかいないかの違いとして、また、運動を行うという点では、発想通りに全身を使って運動できるかどうかに加えて、「身を投げ出せるか投げ出せないか」の違いとしてみる事ができた。

創作ダンス学習を経験した子ども達のジャンプからは、自分の身体をコントロールしながらも一方で身を放り出すという運動そのものの面白さに身を委ねている様子がうかがえた。あたかも身体そのものが運動であり、心と身体が一つになってエネルギーの変化を楽しんでいるかのようであった。その結果が脚だけでなく腕や体幹、手や指先までに神経の行き届いた、左右非対称の、空間を動き回る、その子どもだけの個性的な運動である。松本はダンスでの運動とイメージの相互関係を

通しての学習者の体験を「リズムにのって、全身をなげだす楽しみ」と「湧いてくる動きから身体が語る」と表している⁹⁾が、その具体的な例をこの結果にみる事ができた。

創作ダンス未経験の子どもにとって、3種類のジャンプという運動課題と子ども自身は全く別々に存在するものであった。そして、子ども自身は、あくまでもジャンプという運動を行っていた。これに対して創作ダンス学習経験群は、「3種類のジャンプをいかに行うか」というだけでなく、「身体がジャンプする」あるいは「自分自身がジャンプする」という感覚がみられた。「ジャンプの中に自分をいかに表現するか」「ジャンプのイメージをその空間にどの様に描き出すか」という運動試行であったと思われる。この運動観は他の運動領域にはない創作ダンスならではのものとして、1単元の学習で子どもたちが得た運動の価値観ともいえる。

中学校、高等学校での選択制と男女共修の導入は、男女の違いをも個性の範中とした生涯スポーツへの対応とされている。片岡暁夫は、「舞台にどのような世界を作り出すか」をダンス的な課題とし、スポーツ、ダンス、体操の本質的な特徴を融合した生涯スポーツのための基礎教育を論じている¹⁰⁾が、ダンスの特性に触れる学習の機会を小学校段階でぜひ確保したい。

今回は、ダンス的な意味をもたせずに行わせたにも関わらず、比較の観点を運動の表現要因に置いて行った。授業時間内という制約があり、特別な設定をしての実験には限界があった結果ではあるが、今後さらに筋電図や呼吸との関わりにおいても運動試行の様子を比較検討する必要がある。「心と一体となった」動きは見えだけでなく、呼吸と一体となった動きとして現れるはずである。また、ジャンプ以外の運動や、表現的な運動、また他のダンスについても、未経験の非験者が得られなくなることを願いつつ検討を進めたい。

引用・参考文献

- 1) 神野寛 これからの学校舞踊 太平社 1949
- 2) 伊澤エイ 学校ダンス 金子書房 1950
- 3) 松本千代栄 舞踊教育一ケ年をふりかえって(1948) 舞踊教育 松本千代栄教授退官記念集 1985
- 4) 江口隆哉 学校における舞踊 明星社 1947
- 5) 邦正美 舞踊概説 京都学校舞踊研究所 1948
- 6) 三浦弓杖 表現運動・ダンス(創作型)の考え方・扱い方 学校体育 1990/3 p.10-13
- 7) 新開谷央 新要領における「表現運動・ダンス」をめぐる問題 学校体育 1990/3 p.29-31
- 8) 佐分利育代 井上茂子 聾学校におけるダンス学習指導 鳥取大学教育学部研究報告 教育科学 第33巻 第1号 p.65-79
- 9) 松本千代栄 表現の世界 大修館書店 1985
- 10) 片岡暁夫 生涯スポーツのための基礎教育とは何か 学校体育 1990/11 p.17-19

(1992年4月20日受理)

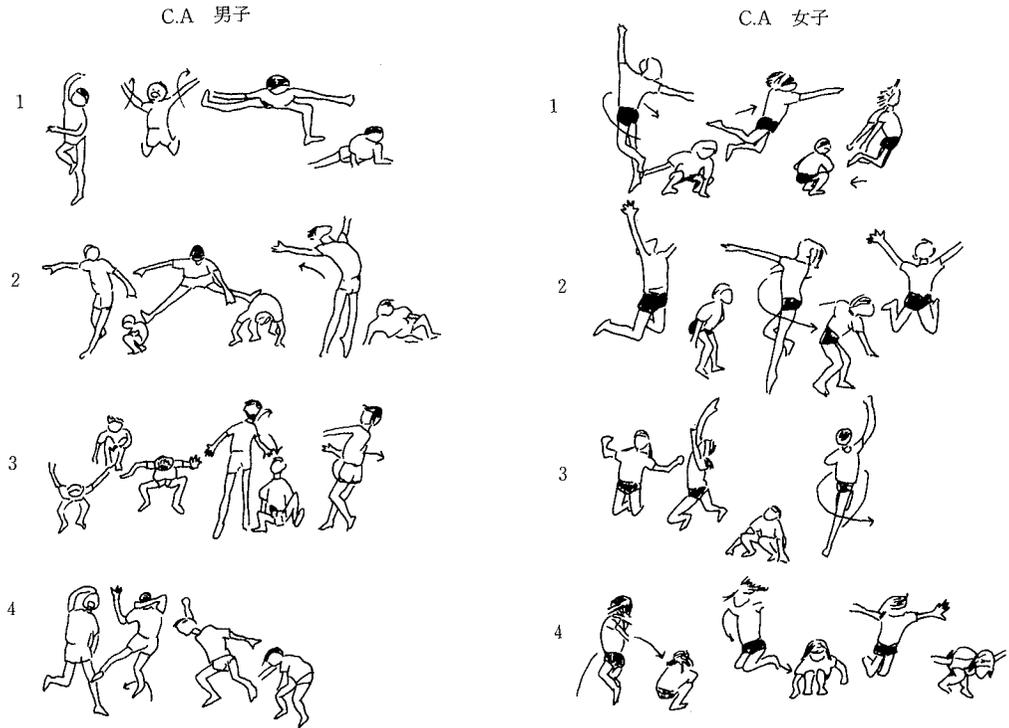


図3 創作ダンス学習経験者の3種類のジャンプ
(C.Aビデオテープより撮影順に1~4番までジャンプの頂点と着地の様子をトレース)

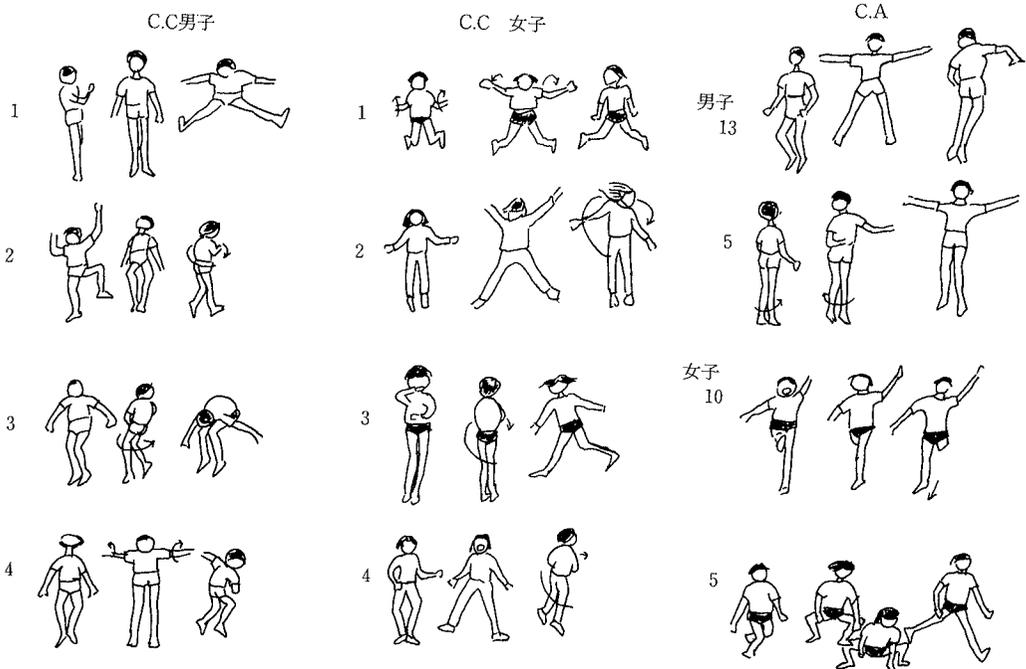


図4 創作ダンス学習未経験者の3種類のジャンプ
(ビデオテープより撮影順に1~4番のジャンプの頂点をトレース, 着地は足で行っていた)

図5 創作ダンスの学習経験者の3種類のジャンプ
(最も違いの少なかった男女2人ずつとりあげた)

